

れる必要があらう。

本書は5部からなる。第1部はフィリピンのコンテクストとして、フィリピンの社会・政治・ナショナリズム・リーダーシップなどの特質をとらえる。第2部は大恐慌、日本の進出、アメリカの後退開始期をとりあげる。第3部は独立のための米比間の折衝をとりあつかう。第4部はコモンウェルス時代。そして第5部は大試練と題してこの日本の進略・占領からフィリピン共和国の発足に至る。最後にクロノロジーと、非常にすぐれた文献目録がつけ加えられている。

歴史学者でない私は、本書の学問的価値を論ずることはできない。しかし、Yale Historical Publications, Studies 22 として本書が刊行されていることは、その学問的価値を証明するものでなかろうか。また私自身にとって、Quezon, Osmeña, Roxas などのフィリピンを動かした人々、あるいはアメリカ側の MacArthur, Stimson, Hoover, Roosevelt などの立役者の活動をまざまざ記録した本書は、まことに面白い読物でもあった。(本岡 武)

Geravdo P. Sicat(ed.): *The Philippines Economy in the 1960's*. Institute of Economic Development and Research, University of the Philippines. Quezon City, 1964. xii + 281 p.

フィリピン経済の代表的文献としては、コーネル大学のゴーレー教授の著書(F. H. Golay: *The Philippines, Public Policy and National Economic Development*. Cornell University Press, Ithaca, N. Y., 1960) があげられるが、本書はこれにつぐものとして評価されている。幸に、私は、去る6月たまたまフィリピン大学の経済発展研究所で本書を入手した。(米・英・独・仏などでの出版物は、外国書取扱いい書店をとおして、わが国にどしどし入れられているが、東南アジア諸国での刊行物は、よほど注意しないと、ミスしがちになるからである。)

フィリピン大学経済発展研究所が、1963年10月から12月にかけて、「1960年代のフィリピン経済」という主題のもとで連続公開講演会をマニラで開いた。そのペーパーを教授が編集したのが本書である。1960年代の経済という主題であるものの、多くの論文は、この時間的限定をこえてフィリピン経済の構造の分析にお

よんでいる。

本文に収録されている論文をあげよう。

- 1) Sicat 教授によるフィリピン経済の総論
- 2) フィリピン大学 Romulo 総長の開講演説からの抜粋としての《1960年代のわれわれの任務》
- 3) フィリピン大学 A. Kintanar, Jr. 教授の《1960年代の公共部門開発のための課税融資》
- 4) 経済企画庁 A. V. Fabella 長官の《開発計画の若干の戦略的側面》
- 5) フィリピン大学 R. W. Hooley 教授の《1960年代の私的貯蓄：社会会計の一試論》
- 6) 国際稲作研究所 V. W. Ruttan 博士の《農地改革と国民経済発展》
- 7) 経済企画庁 D. M. Ferry 立法・政策研究部長の《農民改革の憲法的・社会的側面》
- 8) 国家経済会議 S. K. Roxas 議長の《フィリピンの地域的経済発展——1960年代の工業地域計画》
- 9) Sicat 教授の《フィリピン工業の構造——1960年代の見とおし》
- 10) フィリピン中央銀行 B. Legarda 調査部長の《フィリピン外国貿易の諸問題》
- 11) フィリピン大学 A. A. Castro 経済発展研究所長の《企画長期金融の諸問題》

各ペーパーの末尾に Open Forum として、聴講者と報告者との間の質疑応答が掲載されている。フィリピンでは、私の限られた経験によっても講演のあとのディスカッションが非常にすきなようだ。このディスカッションについては、長所短所いろいろとあるが、ディスカッションによって論点がより明らかになるという長所が認められる。本書はこの長所をよく生かしていると思われる。

個々の論文を批評する余裕はないが、Ruttan 博士の農民改革論はきわめてすぐれたものである。とくに、メンションしておく。(本岡 武)

Wacanānukom Phāsā Lāw khōng Kasuang Sūksāthikān. 2nd. ed., Vientiane, 1962 vi + 1125p. *English-Lao Dictionary (Wacanānukom Angkit-Lāw)*. compiled by Boon Thom Boonyavong, under the supervision of J. DeNoia, with the technical assistance of G. E. Roffe. Vientiane, Lao-

American Association, 1962. xi+367p.

ラオスの出版事情について詳しいことは知らないが、ビエンチャンの書店の店頭に並ぶラオス語の書物は数えるほどしかない。ほとんどがタイ語・英語・中国語またはベトナム語のものである。そのわずかなラオス語書物のうちでこの両書は最も価値のあるものである。

ラオス語の辞書としては、これまでも Cuaz の仏＝ラオ辞典や Guignard のラオ＝仏辞典など主にフランス人の手になるものがずいぶんとあって、それぞれ特徴があるので現在でも利用価値は十分にあるけれども、この両書の意義は新しさと現地の出版ということにあるであろう。前者はラオ＝ラオ辞典で、教育省編纂であることからいわばラオスの標準国語辞典というべきものであり、後者はラオス語で英語を説明した形式の英＝ラオ辞典である。どちらもラオス人のための辞書という体裁をとっているから、われわれには間接的な利用しかできないが、語数にしても前者が1万近く、後者が6,000近くもあるし、従来の辞書とちがって少なくとも綴字のうえではこれを現在の標準ラオス語と認められるから、われわれとしても利用価値は低くない。

ことに後者の英・ラオの方は、実際にはわれわれがラオス語を引く辞書としても問題なく使えるもので、英語のラオス訳は正確のようであるし、タイプ印刷も鮮明で使いよい。もちろん、たとえば go v. i. に対する pai, ôk pai, sadet などの用法の相違まで求めることができないのは仕方あるまい。

しかし前者のラオ・ラオ辞典は見出語の配列が極めて不便である。ひとつの子音字について、子音字+母音記号だけの音節からなる（またはそのような音節を頭にもつ）単語を掲げ、その後に子音字+母音記号+子音字のものをかき、しかも母音記号の序列より末尾の子音字の序列を優先させている。(e.g. kâp は、kâ の次でも kân の次でもなく kap の次に見出される。) これはやはり現行のタイ語辞典の配列法にならうなりして、もう少し便利にしたいところである。

また、両書とも本来の目的からいって当然ではあるが、ラオス語の発音（音素形式）が示されていないこともわれわれにとっては不便である。ラオス語の正書法ではタイ語のような伝統的な不規則綴字といわれるものは整理されていてさほど問題はないとはいえ、わ

れわれの知りたいのはやはり実際に話されるラオス語の形である。

ともかく外国人研究者のための本格的なラオス語辞典が今後ただちに現れることはあるまいから、少なくともしばらくはこの両書が重宝なものとなることは疑いないだろう。
(三谷恭之)

天野利武編：チッタゴン地方の丘陵人—大阪大学東パキスタン総合学術調査隊報告書—1964, ii+316p.

東南アジアから南アジアにかけて旅したものにとって、チッタゴン丘陵地帯やアラカン山脈一帯がこの2地域を分ける地理的分水嶺であるのみならず、文化的分水嶺でもあることを知るであろう。ビルマからはじめてベンガルに行ったものは、そこで「本格的な」異国情緒をおおいに見いだすであろうし、南アジアや西アジアの旅につかれたものにとっては、ラングーンに着くと、そこに「ほんとうの」東洋を発見し、心にいい知れないやすらきを感じることであろう。人間、風俗、習慣……あらゆるものがこのあたりで一変する。

本書は1964年2月20日から3月31まで41日間にわたり、東パキスタンのチッタゴン丘陵地帯で調査をおこなった大阪大学東パキスタン総合学術調査隊の報告書である。

インドのアッサム州、ビルマの中西部にかこまれたこのチッタゴン丘陵地帯にはチャクマ族をはじめとするいろいろな山地民が住んでいるが、この報告書ではこれら山地民と同時に附近に住んでいるベンガル人をも含めて、心理学、人文地理学、言語学、形質人類学、医学、薬学などの立場から調査研究がおこなわれている。内容は (1)チッタゴン丘陵地区の人口、(2)チッタゴン丘陵地区の集落、(3)丘陵人の社会と文化、(4)親族関係用語からみた丘陵人、(5)チャクマ族の言語とマルム・ムロ語彙集三題、(6)東パキスタン丘陵種族の文化変容にみられる象徴知覚の研究、(7)東パキスタンにおける青年の一般的生活意識について、(8)東パキスタンの人類学的研究、(9)東ベンガリ頭蓋について(予報)、(10)チッタゴン丘陵地区のアルコール蒸溜法について、(11)東パキスタンの医療と薬物について。以上のように11の論文は自然科学や社会科学の広汎な範囲にわたっている。

内容を見ていると、チッタゴン丘陵地帯の持つ学問